

受け継がれる伝統—— 篠路獅子舞

※①
北区の伝統文化の一つ、篠路獅子舞。開拓の時代から、日々の糧が与えられたことに感謝する儀式として、毎年欠かすことなく続けられてきました。今回は、篠路獅子舞の歴史と、その保存・伝承に取り組んでいる人たちの活動を紹介します。

水はけが悪く、幾度も水害に見舞われる。そして冬の厳しい寒さ——篠路烈々布の開拓は、現在では想像することができないほど過酷なものでした。入植が始まった当時は、定着できず去っていった人がほとんどだったといえます。そのような環境の中で始められた獅子舞は、豊年鎮火の祈願や感謝を託すものであったとともに、開拓のつらさを癒やし、入植者同士の団結を強めるものだった、と篠路獅子舞保存会副会長の中西俊一さんは語ります。

獅子舞で培われた団結

「父親がずっと獅子舞をやっているのを子どものころから見ただので、私にとって獅子舞は生活そのものでした。十五歳で青年会に入って、まず胴の足さばきを覚えしました。先輩に教わりながら何年か練習を積んだ後、ようやく太鼓の役を受け継ぐことができたのです。そんな仲間同士の伝承を通して、固い結束が培われていったのだと思います」

開拓時の希望や苦勞が込められた獅子舞を篠路烈々布の人々が毎年欠かすことなく続け、北区の貴重な農村文化の礎が築かれていったのでした。

舞いを披露する獅子取りの堀田頌満君(左)と阿部裕介君(右)。今年の舞いでも、大勢の地元の人たちがその勇姿を見守っていました。



篠路神社境内までの道中を練り歩くはやし衆。中西さん(前列左)は、太鼓一筋に五十年。気合いの入ったばちさばきで盛り上げます。



※① 篠路獅子舞について

一説には古代インドで農耕民の神としてあがめられたライオンを偶像化したものとされる獅子舞は、中国から日本各地に伝えられ、土地ごとにさまざまな特徴を持っています。篠路獅子舞は、富山県にそのルーツを持ち、明治三十四(一九〇二)年に、篠路烈々布の若者たちが中心となって始められました。優雅な舞いの特徴とするところから「雌獅子」といわれています。

一方、同じく富山から伝わったとされる東区の丘珠獅子舞は、勇壮な舞いであるため「雄獅子」と呼ばれ、篠路獅子舞と対照的です。獅子舞の全長は約六メートルあり、胴鼻の中には獅子頭と尾が一人ずつ、胴が六人の合わせて八人。また、先頭に「獅子取り」と呼ばれる二人の子どもが配置され、笛や太鼓、鐘などを鳴らすはやし衆を含め、約二十人で構成されます。また獅子に頭をかんでもらうと病気をしないという言い伝えから、舞いが終わった後には、子どもたちに「獅子の頭がみの儀」が行われます。(左写真)

